

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20330031

研究課題名（和文） 東アジアにおける「冊封・朝貢」の終焉とその記憶の形成過程

研究課題名（英文） The end of Celestial Tribute relations and the formation of historiography of it in East Asia

研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA SHIN)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：90301861

研究成果の概要（和文）：

本科研は、所期の計画に従って、主に以下のような事例研究を提示した。第一に、冊封や朝貢に代表される中国の諸王朝と周辺諸国との関係は19世紀末に終焉するが、その過程で、清と周縁諸国との冊封・朝貢関係が言わば近代的国家関係を利用しつつ再編されたことに関する事例研究を示すことができた。第二に、20世紀に入り、中国が19世紀以前の周辺諸国との関係を、ナショナリズムの動向や日本との戦争、その時々々の外交政策などとも関連させながら、伝統的な周辺との関係として記憶化してきたことが事例研究で示された。

研究成果の概要（英文）：

This project successfully examined and published some case studies which it has planned; firstly Qing's re-formation of tribute relations with surrounding countries in late 19c just before such relations were disappeared; secondly the formation of memories in 20c, as traditional relations with surrounding countries, under the influences of nationalism movement, anti-Japanese war and diplomatic policies at that time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010年度	3,000,000	900,000	3,900,000
総計	9,000,000	2,700,000	11,700,000

研究分野：国際関係史

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：冊封・朝貢、互市、朝貢と条約、歴史と記憶、伝統としての記憶の形成、中国のアジア観、中華思想

1. 研究開始当初の背景

周知のとおり、J.K.フェアバンク『中国 社会と歴史(上)』（東京大学出版会、1972年）、坂野正高『近代中国政治外交史』（東京大学出版会、1973年）、衛藤藩吉『近代中国政治史研究』（東京大学出版会、1968年）などの古典的テキストは、いずれも条約と朝貢、西洋と東洋の対峙・衝突、そして西洋＝近代＝

条約が東洋＝伝統＝朝貢を凌駕していく過程が描かれてきた。このような研究潮流は、Immanuel C.Y. Hsu（徐中約）,China's Entrance into the Family of Nations: the diplomatic phase 1858-1880.Harvard University Press,1960.にもすでにあらわれており、その後も梁伯華『近代中国外交的巨変：外交制度与中外関係の研究』（臺灣商務

印書館、1990年)などとして華人世界の研究にも広がりを見せた。その後、濱下武志『近代中国の国際的契機 朝貢貿易システムと近代アジア』(東京大学出版会、1990年)などとして東アジア域内の秩序論が議論され、「伝統」が20世紀にも底流として東アジアに内在化されたという視点が示された。1990年代後半になると、茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』(『世界史リブレット41』山川出版社、1997年)のように、19世紀の中国が「伝統」を意識的に「近代」に改変させていたという議論が生じ、中国が朝貢や冊封をめぐる諸制度を調整しているさまが描かれ始めた。昨今、岡本隆司『属国と自主のあいだ』(名古屋大学出版会、2004年)が公刊され、1880年代から90年代にかけての中国が、冊封/朝貢に基づく関係と条約に基づく関係という二つのスタンダードをどのように使用していたかという詳細な状況が明らかになった。

他方、このような言論は、岡部達味「中国外交の古典的性格」(『外交フォーラム』100号、1996年12月)に見られるように、現代中国外交をめぐる議論にも影響を与え、かつての伝統として19世紀後半に近代に凌駕された伝統が、現代に入っても政治文化として中国に根付いているという議論につながった。

しかし、研究史の大半は、19世紀後半に集中し、多くの議論は条約と朝貢の相克というかたちで描き、そして現代東アジア国際政治分析で政治文化としての「伝統」が言及されるという状況は現在に至るまで大きな変化がない。こうした中で、岡本隆司は中国の伝統には「互市」という冊封・朝貢とは異なる通商関係にかかわる側面があることを描き出しつつあり、また茂木は2006年度の国際政治学会部会にて議論したように思想史の面から、20世紀初頭の対外観と「伝統」の関係を研究し始め、川島真は「1930-40年代の日中におけるアジア観とアイデンティティ-新亜細亜』『新東方』に反射するアジア観-」(アジア政経学会・<共通論題III>「アジアの越境」2006年10月29日)にて、その両者を媒介する1920-30年代の議論を展開し、冊封や朝貢をめぐる記憶の形成、制度化の研究の端緒をひらいた。このような過程をふまえ、三者が共同研究として当該テーマを議論することの意義を見出し、本科研を申請するにいたった。

2. 研究の目的

グローバル化と台頭する中国という二つの大きな変容要因に直面している東アジアの国際政治、国際関係を考える上で、東アジアに歴史的に内在したとされている伝統的国際秩序が、その存在の有無をふくめて注目さ

れ、重要な課題となっている。本研究では、冊封・朝貢などという語とともに用いられる中国を中心とする伝統的国際秩序なるものが、存在の有無への問いも含めて、それが果たしてどのようなもので、どのように意識化されてきたのかということ、19世紀の後半から20世紀後半に至る長期的なスパンで解明することを目的とする。

実際、東アジアの「伝統」とされる国際秩序は、そもそも体制やシステムといえるほど制度化されていたわけでも、また単純なものではなく、そしてそれは特に19世紀後半に相当の変容を遂げ、19世紀末から20世紀初頭に制度的、理念的に衰退していく最終過程があり、それとほぼ同時に新たな記憶作りが中国や日本などで始まり、やや単純化された図式で「伝統」が描かれ、学校教育や著作物により理念化されて、社会の記憶となり、それが中国の外交政策の理念的根拠としてしばしば用いられるに至った。現代の中国外交をめぐるしばしば指摘される、中国外交の伝統、大国外交、あるいは中華思想などという言説、そして東アジアの伝統的国際秩序なるものの総体は、この過程全体、ほぼ百年全体を描き出してこそ、はじめて解明し、理解できるであろう。

しかし、実際のところこれまでの研究は19世紀の後半の「条約と朝貢」の対立過程を描き、あるいは伝統的秩序の変容を実証的に解明してきたものの、日清戦争前後以後の状況となるとほとんど研究がない。そうであるがため、昨今の東アジア地域論、東アジア共同体論、東アジア国際秩序を論じる際に、比較的安易に歴史的アナロジーとして冊封や朝貢なる語が乱用される傾向にあり、歴史からの誤ったメッセージが現代社会に伝えられている面もある。そこで、アジア政治外交史研究がおこなうべき、学術的にも意義があり、かつ現代社会に対する歴史からの提言としてふさわしいものとして、上記のような課題を設定した。

本研究の上記の目的は、具体的には以下の三点にわかれる。①東アジア国際政治史上の伝統とされる、「冊封・朝貢・互市」なるものが、そもそもどのようなもので、それがいかに変容し、どのようにして終焉したのか(あるいは内在化した)、ということ解明する。②その実際には終焉した(あるいは内在化した)ものが、どのように位置づけられ、また記憶として形成され、制度化されたのか、ということ解明する。③そのように意識化された、「伝統」なるものが、1930年代以後の東アジア国際政治史において、いかに利用され、また立ちあらわれたのかということに関する事例をとりあげ、①②をふまえてその「伝統」の定位を考察する。この①②③は、東アジア国際政

治史の「伝統」なるものの100年にわたる長期的な考察であり、これを経てこそ、東アジア国際政治史の基層とされる部分を相対化して、歴史からの提言をもおこなうことができるようになるのだと考える。

3. 研究の方法

上記の目的に記した①②③について、それぞれ作業班を構成し、①＝岡本隆司、②＝茂木敏夫、③＝川島真をそれぞれチーフとし、全体は川島が調整をおこなう。そして、それぞれのメンバーが他班にも加わるかたちで作業をおこなっていくものとする。また、海外の研究者として、①については茅海建（北京大学、中国）、②については唐啓華（国立政治大学、台湾）、③については王建朗（社会科学院近代史研究所、中国）のアドヴァイスをうけながら進めた。

具体的な作業分担は下記の通りに予定されていたが、おおむねその線に沿って、それぞれ研究を行い、海外での国際学会での報告などを通じて成果を公にしつつ、適宜、史料や成果などについて情報交換をおこないながら研究を進めていった。

		作業内容
第一 作業 班	① — 1	19世紀後半の中国の対外関係の枠組みの変容を琉球、日本、東南アジアなどとの関係から今一度整理し、「属国と自主」という中朝関係から得られた仮説が、他地域に適用可能かどうかを検証する。そして、それぞれの関係の終焉過程を解明する。
	① — 2	1895年以後の中国の制度変容、特に冊封・朝貢を担当した礼部と理藩院の組織変容と、儀礼の変容過程について検証する。
第二 作業 班	② — 1	中国の清末民初（1900－1920s）における歴史教科書、外交史関係のテキストから、その時期の対外観の形成と、伝統の定位について解明する。

② — 2	孫文、中国国民党による「伝統」をめぐる言説を整理し、蒋介石日記（スタンフォード大学所蔵）にあらわれる対外観を解明する。	
② — 3	日本における中華思想という言説の形成を解明すべく、那波利貞『中華思想』（岩波書店、1936年）などのテキストを分析する	
第 三 作 業 班	③ — 1	1930年代以後の東アジアの外交の現場における伝統への言及について外交文書を分析し、その扱われ方、歴史的な背景などを個別的に検討する。

2011年3月9－10日、研究成果に関する議論も含めてワークショップ（中国近代外交史研究会）を東京大学駒場キャンパスで実施した。そこでは、研究代表者や分担者の著作をめぐる討論会をはじめ、若手研究者の報告など、この科研のテーマに止まらない内容について、活発な議論が重ねられた。

4. 研究成果

2008年度は、川島真（研究代表者）と茂木敏夫、岡本隆司（研究分担者）を含む中国近代外交史の若手で構成されたメンバーによって論文集を編集すべく、そのための論文のブラッシュアップに充てた一年となった。これでは、朝貢と互市の関係とともに、在外使臣・領事の派遣に関する清の側の考え方、朝鮮との冊封・朝貢体制の再編などといった論点を含んでいた。また、川島真は、これまで進めていた20世紀前半の中国のアジア観を所謂伝統的な諸関係との関連で論じた、「近代中国のアジア観と日本—『伝統的』対外関係との関連で」（高原明生ほか編『越境』<現代アジア研究1>（慶應義塾大学出版会）、2008年、415-441頁）などを公刊した。

2009年度には、前年度来の懸案であった論文集が、岡本隆司・川島真『中国近代外交の胎動』（東京大学出版会、2009年、211頁）として公刊された。これについては、数点の学術的な書評がおこなわれたが、特に2009年7月25－26日には、川島真、岡本隆司が参加して、台湾の国立政治大学歴史学系で本書に関する書評報告を中心とした「東亞近代国際史研討會—臺日青年學者論壇」を開催した。このほか、川島真がアジア政経学会東アジア大会、日本現代中国学会それぞれの研究

大会の全大会において、本科研のテーマに関わる内容を報告したほか、China's Re-interpretation of the Chinese "World Order", 1900-40s, in Anthony Reid and Zheng Yangwen eds, Negotiating Asymmetry: China's Place in Asia National University of Singapore Press, 2009, pp.139-158. とうかたちで、英文で成果を公刊した。また、茂木敏夫は、「中国王朝国家の秩序とその近代」、(『理想』、682号、2009年、83-93頁)にて、中国の王朝の世界秩序を整理し、その近代的変容を論じた。これらの一連の作業は、それぞれ第一、第二、第三作業班の所期の目標にそっておこなわれており、引き続き個別に研究がすすめられた。

2010年度には研究の集大成とすべく、国際政治学会の部会において、岡本隆司が中国における主権概念の形成について報告し、川島真がコメントをおこなった。また、岩波講座の東アジア近現代史通史では、岡本隆司が「属国／保護と自主—琉球・ベトナム・朝鮮」(和田春樹ほか編『岩波講座 東アジア近現代通史 1 東アジア世界の近代 19世紀』(岩波書店、2010年、154-171頁)を著し、川島真が通史を記した。また、2011年3月には、川島真、岡本隆司、茂木敏夫の研究代表者と分担者が参加し、東京大学でワークショップを開催した。ここでは、川島と岡本の近刊の書籍の書評会のほか、若手研究者の研究報告会もおこなわれた。

総じて、初期の目標の第一から第三の作業それぞれが進行し、冊封や朝貢の変容過程、その記憶化、知識化の過程を描き出すことができていると考えられるが、依然として仮説であったり、事例研究にとどまっているのが大半である。今後、事例研究を積み重ねていきたい。また、第二作業班の③(日本における中華思想という概念の形成過程)については、検討はされているものの、成果は公刊できておらず、課題として残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

①川島真、近現代中国における国境の記憶—「本来の中国の領域」をめぐる、境界研究、1号、査読なし、2010、1-17

②岡本隆司、朝貢と互市と會典、京都府立大学学術報告(人文)、査読なし、62号、2010、17-47

③岡本隆司、属国／保護と自主—琉球・ベトナム・朝鮮、和田春樹ほか編『岩波講座 東

アジア近現代通史 1 東アジア世界の近代 19世紀』(岩波書店)、査読なし、2010、154-171

④茂木敏夫、中国王朝国家の秩序とその近代」、理想、査読なし、682号、2009、83-93

⑤岡本隆司、清仏戦争の終結—天津条約の締結過程、京都府立大学学術報告(人文)、査読なし、61号、2009、19-34

⑥岡本隆司・茂木敏夫、中華帝国の近代的再編—在外華人保護論の台頭をめぐる、岡本隆司・川島真編『中国近代外交の胎動』(東京大学出版会、2009年4月)、査読あり、2009、139-158

⑦岡本隆司、韓国の独立と清朝の外交—独立と自主のあいだ、岡本隆司・川島真編『中国近代外交の胎動』(東京大学出版会)、査読あり、2009、161-180

⑧岡本隆司、清末の対外体制と対外関係、村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史 1 中華世界と近代』(東京大学出版会)、査読あり、2009、15-35

⑨川島真、China's Re-interpretation of the Chinese "World Order", 1900-40s, in Anthony Reid and Zheng Yangwen eds, Negotiating Asymmetry: China's Place in Asia National University of Singapore Press, 査読あり、2009, pp.139-158.

⑩川島真、領域と記憶—租界・租借地・勢力範囲をめぐる言説と制度、貴志俊彦・谷垣真理子・深町英夫編『模索する近代日中関係—対話と共存の時代—』(東京大学出版会)、査読なし、2009、159-183

⑪岡本隆司、清仏戦争への道—李・フルニエ協定の成立と和平の挫折」、京都府立大学学術報告(人文、社会) 査読なし、60号、2008、79-97

⑫川島真、民国期における中国近代史の創成とアジア像—Chinese World Order とウェストファリア体制のはざままで、加々美光行編『中国内外政治と相互依存』(日本評論社)、査読なし、2008、378-403

⑬川島真、近代中国のアジア観と日本—『伝統的』対外関係との関連で、高原明生ほか編『越境』<現代アジア研究1>(慶應義塾大学出版会)、査読なし、2008、415-441

⑭川島真、朝鮮半島の中国租界、中国社会科学

学院近代史研究所編『中華民国史研究三十年(1972—2002年)』中巻、社会科学文献出版社、査読なし、2008、745—756

〔学会発表〕(計11件)

①岡本隆司、「主権」の形成—20世紀初頭の中国とチベット・モンゴル、日本国際政治学会2010年度研究大会部会「地域からの帝国論：比較史と現在」報告、札幌コンベンションセンター 2010年10月29日

②川島真、民国外交にとっての一つの負荷—「本来のあるべき姿」と「国際的地位の向上」、日本現代中国学会第60回全国学術大会、共通論題、2010年10月16日、於：中央大学

③岡本隆司、大君と自主と獨立—19世紀朝鮮の国際的地位をめぐる、韓国ソウル大校奎章閣韓國學研究院、28 August, 2010

④川島真、国境の記憶：近現代中国の場合、2010年アジア政経学会東日本大会、共通論題、2010年5月22日、於：北海道大学

⑤川島真、Chinese Image and Policy toward East Asian Regional Integration: Historical Perspective” (CIAS 2nd Seminar in Series, A Multidisciplinary Approach to Analyze Regional Integration, Dec.7th, 2009, Venue: Seminar Room 213, Inamori Center, CIAS, Kyoto University, Regional Integration in Asia Introduction to the Seminar)

⑥茂木敏夫、閻立『清末中国の対日政策と日本語認識』を読んで、大阪経済大学日本経済史研究所第56回経済史研究会、2009年10月

⑦岡本隆司、朝貢と互市と會典、明清史夏合宿2009、2009年8月7日、岩手県一関市矢びつ温泉瑞泉閣、セミナーハウス、2009年8月7日

⑧川島真、20世紀前半期中国外交史之形成与展開—兩種起源与軌道、“近代中外關係史”国際学術討論会、主催：中国社会科学院近代史研究所中外關係史研究室・湖南師範大学歴史文化学院、於：湖南師範大学、2008年7月19—20日

⑨川島真、中国近代の政治言説から政治外交史へ—档案との対話十五年—、日本大学史学会、於日本大学、2008年6月21日

⑩岡本隆司、十九世紀中國的自由貿易和保護關稅—「裁釐加稅」的形成過程、第一屆東方人文思想國際學術研討會、於：玄奘大學(台灣新竹市)、2009年6月12日

⑪川島真、The Image of Asia in Modern China: Historiography of the Traditional Chinese 'World Order'(Session 12: Empire in Modernity: A Comparative Perspective, The First Congress of the Asian Association of World Historians, World History Studies and World History Education, 30 May 2009, Osaka University Nakanoshima Center

〔図書〕(計8件)

①岡本隆司、講談社、中国「反日」の源流、2011、250

②川島真、岩波書店、近代国家への模索1894—1925、2010、242

③和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真編著、岩波書店、岩波講座 東アジア近現代史 第1巻 東アジア世界の近代 19世紀、2010、377

④岡本隆司・川島真編著、東京大学出版会、中国近代外交の胎動、2009、211

⑤川島真・毛里和子、岩波書店、グローバル中国への道程—外交150年、2009、212

⑥川島真ほか、東京大学出版会、日台關係史1945—2008、2009、261

⑦劉傑・川島真編著、東京大学出版会、1945年の歴史認識—<終戦>をめぐる日中対話の試み—、2009、300

⑧岡本隆司、講談社、世界のなかの日清韓關係史—交隣と属国、自主と獨立—、2008、204

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
<http://www.kawashimashin.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA SHIN)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：90301861

(2)研究分担者

茂木敏夫 (MOTEGI TOSIO)
東京女子大学・現代文化学部・教授
研究者番号：10239577

(3)研究分担者

岡本隆司 (OKAMOTO TAKASHI)
京都府立大学・文学部・教授
研究者番号：70260742